

---

# 爆走レース

都市耿介

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

爆走レース

### 【Nコード】

N0706E

### 【作者名】

都市耿介

### 【あらすじ】

『30分間で1着でゴールした選手が優勝です。ただし、2着以降の選手は、爆死します・・・』ラストに注目です。「政吉とマサヨシ」もよろしく願います。

『さあ、まもなく始まります！ 地獄のレースです！』  
そんな声が何度も耳の中で響いていた。

目を開けると俺は何かの乗り物の中にいた。前部にハンドルが付いていた。さらには、スイッチやギアチェンジなどが付いていた。ブレーキやアクセルも。ここは運転席のようだ。決して広くはない大きさだ。1人が入れる広さだ。席は鉄製だ。座り心地が悪い。コックピットから外の景色を見てみた。全ての景色が荒野となっていた。建物が何もなく植物すらなかった。

「一体、ここは……」  
なぜ、俺はここにいるんだ？

俺の名前は柴崎正樹。27才。職業は普通の会社員だ。

しかし、俺はなぜこんなところにいるんだ？ 昨夜の夕食の後にテレビを見ながら、残りの仕事を仕上げていた。その後はベッドで横になり眠りに着いた。それからの事が全く覚えていない。  
するとまた放送の声が聞こえてきた。

『早く覚醒して下さい。もうすぐでレースを始めますので』  
レース？

何のレースだ？

『どうやら、選手は全員がお目覚めですね。それでは、これよりレースを始めます。選手の皆様は準備をして下さい』

「何を言っているんだ？」 放送の声は俺の言葉など無視して、レースの説明を始めた。

『選手の皆様。お手元の液晶モニターをご覧ください。モニターの右端に上空から撮られた画像が映っています』

狭い室内で液晶モニターを探す。

「あ」

モニターは前部に埋め込まれていた。とても小さな画面であった。

そこには荒野の上で横一列にたくさん乗り物があつた。

『選手は全員で247名。国籍は様々。優勝すれば自由の身になります』

自由の身？ 一体どういう事だ？

俺は何者かに誘拐されたのか？ しかし、よくたくさん人間を集めたものだ。

『これよりレースの説明を始めます』

放送の音が説明し始めた。俺はそれを聞きながら、ドアの手すりを探すがそれらしきものがなかった。

『ルールは簡単。モニターに映つてある地図に沿つて30分間でゴールを目指して下さい。1着でゴールした選手が優勝です。ただし、2着以降の選手全員は爆死します』 爆死？ 俺はその言葉により冷静でいられなくなった。

「死んでたまるか！」

俺はコックピットのガラスを壊せそうな物を探すため、座席の下に手を伸ばした。

すると自分の手が何かに触れた。俺はそれを掴んで持ち上げる。

「嘘だろ」

この質感、この重み。間違いなかった。

銃だ。マシンガンだ。映画に出てくるような大きい奴だ。さらに座席の下から、銃弾が詰まったマガジンもたくさん出てきた。

『レースを盛り上げるため、面白いルールがあります。これから、選手の皆さまは10分おきに必ずほかの選手を殺して下さい。最低でも3人は殺して下さい。もし、選手がそうしないで10分を過ぎると、その選手は爆死します』

10分で3人。最低でも30分間で9人も殺さないといけないのか。

俺は自分の死が間近に迫っている事に恐怖心を抱いた。

『ほかにもこのフィールドには、罾が仕掛けられています。なので選手全員が死ぬ場合もありますので、心してレースに参加して下さい』

い』

すると液晶モニターの画面が乗り物の映像に変わった。俺はそれを見て初めてどんな乗り物かがわかった。

今俺が乗っている乗り物は、半月型の形をしており後部に巨大なブースターが2つ付いていた。車輪の数も2つだ。車というよりバイクに近い。爆弾は車体の下にあるのがわかった。

「マジかよ」

俺はまだ死ぬわけにはいかない。俺をこんな目に合わせた犯人を見つけないと。

突如、バイクのエンジンが作動した。

『それではレースを始めます。バイクの運転の仕方は液晶モニターに出ています。随時確認して下さい』

俺は液晶モニターでバイクの運転の仕方を見た。案外、普通の車とほとんど変わらなかった。ただ怪しげな部分を覗いては。

俺はだいたいの覚え、レースに待ち望むことにした。

『準備はできましたか？ レース開始直後、10秒以内にスタートしなかった選手は失格として遠隔操作で起爆させます。わかりましたか？』

俺はハンドルに手を乗せた。そして高鳴る心臓の鼓動を抑えた。

『それではレーススタート！』

俺は何の迷いもなくアクセルをふんだ。バイクが発進する。すると、左右の扉が横に動いた。それで左右の様子を確認しやすくなっただかと思いきや。

『今、全てのバイクの扉が開きました。これで横にいる選手たちを殺すことが簡単になります』  
なるほど。

俺は横に視線を向けながら、前へ前へと進んだ。

すると右横から銃弾が飛んできた。確認をすると敵がいた。男だ。相手は片手にハンドルを持ったまま、さらにもう片方にマシンガンを持って撃ち始めた。

俺はハンドルを回して相手の攻撃を避ける。

「やるしかないのか？」

俺はマシンガンをその男に向けて、撃ちまくった。最初の5発はバイクに当たったが、次の2発は男の頭を撃ちぬいた。男は死亡した。男のバイクは横転し、ほかのバイクを巻き添えに爆発した。

するとモニターから音楽が鳴った。画面にクリアの文字が現れた。そうか、俺は3人を殺したのか。後15人。残り時間27分。7分は逃げればいいのか。

後ろの方から銃声や爆発が聞こえてきた。地獄とはこのことだ。俺は敵の攻撃を避けながら前へと前進した。

レース開始から10分後。今のところ、俺は60番以内のところにいる。選手の人気は100人ほどだ。

俺は敵から攻撃を受けながら逃げていた。しかし途中から状況が一変した。

前方に地中から何かが現れた。

「嘘だろ」

地中からいくつものミサイル砲が現れたのだ。それぞれの砲台からミサイルが一斉に発射された。

俺は逃げる。

ミサイルがほかの選手のバイクに直撃した。無論、爆発する。俺はミサイルを避けながらほかの選手を殺しながら前を目指した。

するとミサイルがすぐ近くに迫ってきていた。

「やばい」

俺は急いでレバーを引いた。するとバイクが猛スピードでミサイルの下をくぐっていった。

「やったぜ」

残り時間5分。

俺はルール通りに人を殺して、先ほど3人目を殺したばかりだ。ゴールまで間近だった。これまでの地獄が嘘のようだった。

ほかの選手は俺より後ろの方向だ。誰も俺を追い越すことはできない。俺の勝ちだ。

ゴールはもう目の前だ。俺は勝ったんだ。

必ず犯人を捕まえてやる。そして殺す。

ゴールまで50メートル。「俺の勝ち」

ゴールまで30メートル。「もうすぐ」

10メートル。

「もうすぐ!」

5メートル。

「やっ……」

俺の首に銃弾が貫いた。その後、俺のすぐ横を通り過ぎるバイクが見えた。

「レース終了。優勝者が決まりました。優勝者は、田中太郎さんです!」

俺は死ぬ。

耳の中で爆発音が聞こえてきた。

俺はそこで目が覚めた。妙に胸がくるしかった。

「目が覚めたか」

俺の前にサングラスの男が現れた。男は名簿のような物を持ってこう言った。「収容番号4961。柴崎正樹。お前は連続殺人だ。

この正義の名において死刑だ」その瞬間、俺は全ての記憶を思い出した。

俺は連続殺人犯だ。何人もの命を奪い、バラバラに刻みこんだ。昨日の晩もテレビを見ながら、女の足を刻んでいた。だが警察に家を実撃され逮捕となった。証拠は全て揃っていた。裁判無しで死刑

に決まった。だが死刑の前に執行人は俺にチャンスを与えた。

それは今、世界中の死刑場で普及しているオンラインゲーム『爆走ゲーム』であった。このゲームはバーチャルシステムで専用の機械の中で眠れば、まるで実際に体験しているような感覚が伝わってくるのだ。痛みも感じる。ゲームをする時は、ところどころの記憶を失ってしまう。そのため俺は自分が殺人犯だと、思い出せなかったのだ。

ではなぜ俺は、ゲームに参加したのか。それは、ゲームに勝つと死刑免除になるからだ。しかし、ゲームに負けるとショック死となる。ゲームに負けると機械に強い電波が流れだし、体の心臓機能を停止させるのだ。

俺は死ぬ。当然の報いだ。

こんなものか？ ゲームで死刑が決まるってよ。

.....

正樹の心臓が停止していた。

執行人は笑みを浮かべ、亡骸となった正樹に真実を告げた。

「全く馬鹿だな。お前は殺人犯じゃねえよ。それは偽物の記憶だ。

ゲームは存在するが、殺人犯のお前は存在しない。お前は国に選ばれた実験台だ。まあお前の本来の姿は俺は知らないけどな」

そう言って執行人はその場を去っていた。

爆走レース

終わり

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0706e/>

---

爆走レース

2008年8月29日17時10分発行